

こと・かた・ことば：情報の発生と伝達によせて

Information as a matter of pattern-matrix-patrix

村主 朋 英*

Tomohide MURANUSHI

要 旨

本稿は、情報学と個人との関係再構築を図る過程の一部である。情報学にとって最も中核となる要因は思考する自我であると見なした上でそれを「ひと」を呼びかえ、ことば（おおまかに情報と比定できる）がひとをとりまいて見なす考えを基盤に置く。本稿は、ひととその世界について考察を進めた。ひとが世界の変化を許容しない、つまり「わかろうとしない状態」を「ひとは凝っている」と呼ぶという用語法を導入し、その原因は特定のことばに対する執着であるとの解を得た。次に、世界・ひと・ことばの間の関係に関して「こと」「かた」という用語を導入し、それを踏まえて「凝り」を回避する方策を検討した。ひとが凝ったり凝らなかつたりする様を自然と見なす態度を持つことにより、自身の凝りならびにことばに対する制御のための下地が得られるという着想を引き出した。

キーワード：情報学の基礎 情報学的コスモロジー

1. 背景と課題

本稿は、一連の論稿[1][2][3]を背景とする。この工程は、情報学と個人との関係再構築を企図して着手したものである。

第一論稿[1]では、情報学にとって最も中核となる要因は「思考する自我」であるとの解を措き、それを「ひと」を呼びかえた上で、そのまわりをことばがとりまいて見なす世界観を得た。第二論稿[2]では、ことばの織り成す総体は混沌であるとの解を得た。次いで、その時間的・空間的特質を検討し、混沌（ことばの総体）に内在するひとびとがその機能および構造の要因であるという解へと到った。第三論稿[3]では、ひと（思考する自我）と世界との関係を論じた。それぞれの時点のそれぞれのひとが各々固有の世界を持ち、そうして諸世界が併存する状況について、矛盾という語の転用によって概念化した。これにより第二論稿で認めた混沌の局構造を推定することができるとともに、探求の困難な「思考する自我」の特性についていくつかの手がかりが得られた。

こうして、ひととことばによって成る総体の探求において新たな筋が得られた。しかしこの延長で素直に展開を進めるだけでは、単にひとつの理論を得るに留まるであろう。そもそもそれは明晰な記述ではなく、限界と制約の介在によって自我（ひと自身）を確認できるというある種逆説的な帰結である。それに加えて論考主体自身の問題であるから、そのような限界・制約は、「打ち克ちがたい」（正面から解決を図ることのできない）

* 愛知淑徳大学人間情報学部 muransky @ asu.aasa.ac.jp

問題であると推察される。

そこで本稿では、事態に関する探求に留まらず、「方策」（思考する自我の動態に対する処方）の模索を目的に加えて展解を進める。

2. 計画

2.1 方針

一連の著作は、論述を唯一の方法として採用している。

人々を刮目させるような新奇な知見の開陳を目的とするのではなく、評釈の風雨の中で自説を固守することなく、静穏で開かれた荒野に身を置いて確かなことばを選び継ぐことを旨とする。そのため、論考（論証ないし補強・精緻化の作業）を後日の補完に期して引用を抑制し、着想の導出・展開（とりわけ適切な概念の整形）に注力するという方針を採った。その結果、得られる成果は仮説群あるいは仮定と推論から成る架構（仮構）である。本稿はこの営為を継承し、考究過程の叙述に集中する。

第一論稿では一切の明示的な引用を排除した。それに対し第二論稿と第三論稿においては、概念型を引き出すという目的の下で限定的な引用を行なったが、実のところ、いずれも不可欠な助力とは認められない。有用であるとしてもその援用を後日の作業に期すればよいことだから、本稿では再び一切の明示的な引用を回避する。

2.2 戦術

背景とする一連の論稿と同様、概念の形成・整形のもらたす解の追求を実質的な方法（戦術的方针）とする。

第一論稿では、“基本構成要素となる概念をもみずから構築または再構築しながら反復して考えた成果を揃え、借用を避け、慎重に選択・調整した言葉を用いてそれら思考の成果を再現し、最後にそれらの言葉を論文という形式の下で構成する”[1]という方針に基づき、既成の用語（とくに学術用語）と異なる分けまとめを求めて日用語（自然語）を利用するという戦術を採った。

当然ながらそれは種々の危険が懸念されるところだが、専門用語の参照によりターミノロジーの網に組み込まれ、果てしない概念規定論争に巻き込まれたりすることこそ強く懸念するとともに、日用語の包括的特性に期待した（学術用語がいわばプラスチックラップのようなものだとなれば、日用語はアルミフォイルで包むようなものと喩えることができる）。

一方、第二論稿と第三論稿では引用から概念型（模型）を引き出した上で、ずらして適用することによって既成概念の影響の回避を試みた。その結果、鍵用語として「混沌」「矛盾」の2語を導入したが、こちらは新造語ではないために既存の用法の影響を排除できない等の危険が加わる。第一論稿で導入した用語「ひと」「ことば」も基本的には同様であるが、これらは漢熟語であるため、日用語と若干なりとも距離を感じさせ、フォーマルで確立された印象（既視感のような）を与えるし、また概してリズムカルであるがゆえに、語義の形骸化が生ずるという心配がある。そのことを踏まえ、本稿は第一論稿と同様に漢字語を避け、日本語固有の語の利用を図る。

3. 新たな用語の導入とその成果

3.1 「私が凝っている」

前稿[3]は、「わかるまでわからない」という命題から出発し、ひとびとの世界が互いに「矛盾」と呼びうる関係にあるという解を得た。この、矛盾と名付けられる特質の「打ち克ちがたさ」を顧みれば、この解の最も有効な局面は「思考する自我」それ自体に関わる問題であると考えられる。

前稿では、ひとが自分の世界の変化を許容する状態を「そのひとの世界は開いている」、変化を許容しない状態を「そのひとの世界が閉じている」と記述した。雑駁に表せば、「わかろうとしない状態」である。そのうちには、「あえてわかろうとはしない」場合と「あえてわかるまいとする」場合とがあると思われ、前者は主に「わかっていないことに気づかない」または「そのことを問題とは思わない」ことによるのだろう。その他、種々のケースがあるかもしれないが、いずれにせよ、世界の展開はしばしば停滞するようである。

単に世界から出られない／他人と異なるというだけではなく、停滞に気づかなかったり意図的に閉じこもったりする点を踏まえ、この様を「ひとは凝っている」と表してはいかがだろうか。

加えて、補助的な戦術として、一人称を導入して再記述すると効果が高まりそうである。理性・悟性や認知過程のような雲つかむようなことがらではなく、対象化しえぬ思考する自我、つまり「自身」のことを語るには、「ひと」という主語では不足を覚えるからである。すなわち、(そのようなとき)「私が凝っている」と称するというわけである。

この用語法の根本問題は、この語の日用語としての語感に全面的に依存する点であり、当然ながら、この語を母語に持つ者以外には効果を期待できない。しかしその点はいずれ「翻訳」という工程を通じて後日に調整することにして、ひとまず解の展開を進めよう。

3.2 凝りの諸相

ひとたび「私が凝っている」という概念を得ると、自らと自らの世界に関する経験におけるある一連の傾向を総括して記述できるようになる。

おそらくそのように呼びうる状況(「思い当たること」)は、われわれの世界経験におけるあらゆる局面で生じていると考えられる。考えられる症候として、判断の停滞、推論の硬直、理解の阻害、視野の狭隘といったものがあげられる。

単に蒙昧さ、思考能力の低さ、あるいは自覚の薄さといった技能的要因によるとは限らず、欲求・欲望の行使、感情による衝動、あるいは自らの行動様式の貫徹を図ろうとするときに、一時的な麻痺のように「凝る」こともあることだろう。そのようなことは個人的な領域から社会・公共に関わる案件まで、何らかの「対立」を知覚する際にあまねく起こりうると考えられる。すなわち、意図や計画の衝突、目標や動線の交錯、思わくの齟齬、経済的利害の相克、政治的見解や方針の相違、価値観・倫理観のずれなどを認めたときである。

これらの種別に加え、「あえてわかろうとはしない」場合と「あえてわかるまいとする」場合および「わかっていないことに気づかない」「そのことを問題とは思わない」といったケースは、社会的・心理的にはそれぞれ性格を異にするかもしれないが、「思考する自我」に制約を与えているという共通項を持つことが枢要である。

そこでは、欲望(あるいは意志)と価値認識とが同質の要因として作用するようで、いずれも自己の言動に対する執着・固執を生じさせるとともに、相対的に他者の言動に対する否認・邪視、あるいは無視を誘発することがありそうである。そのとき、互いの世界が相違を有したまま固着し(あるいは場合によっては片方だけが一方的に膠着し)、容易に communicate できない状態に陥る可能性がある。

その種の対峙の相手は「個人」とは限らず、企業や機関、あるいは政党・教団・学派等の組織や集団、さらにはヒト科以外の生物、ひるがえって、神や想像上の怪物など、他者として知覚しうる限りのあらゆる対象が当たるものと想定される。

こうした「条件」が満たされたときに必ず凝るとは限らないだろう。しかし、まずは「凝ることがある」というだけでも、問題と扱う価値があるのではなかろうか。「凝っていない」状態に変わったとしても、いつかまたひとは(私は)凝ることだろう。おおかた別の事情によることだろうが、凝るということにはかわりない。

しかも、「凝ることがある」ために、「凝っていない」ときも、「私」が他と峻別されることは見逃せない。先鋭的に「凝っている」状態でなくても、結局は全体として何かに囚われていると見ることもできる。

そして何より、状態を随意にかえているわけではなさそうだという点が重大である。不意・不用意に凝る、

知らない間に凝っている、ということがあり、さらには「わかっているのに凝りを解くことができない」こともありうることに懸念される。

もちろん日常的には、それらを社会生活（または生態系）につきものの挿話と見なすことは可能だろう。凝っていないことが「普通」であり、そのようなことがあるとしても、気の迷いや過ちにすぎず、まもなく（やがて/いずれは）治る（ただすことができる）ような異状とも見られるかもしれない。取り戻した理性を保ち、和解・妥協を模索し、正当・妥当な判断をふるい分けて累積していこうではないか。……そのような、practiceの領域の問題にすぎないのかもしれない。

しかし、本稿を含む一連の工程で探求してきた「思考する自我」は、「情報学という過程（行為）の中核」として位置づけたものである。学術研究の専門職であったなら「態勢を整え組織的な営為のもとで逐次成果を累積すればよい」と楽観視できようが、ここでは、稚拙であってもすべてを自ら考え抜く主体を想定しているのだから、それが「しばしば、しかも不用意に凝る」ならば適格とは言いがたい。そうして明滅し、「常に正気を保ってはいない」ことは重い問題ではなかろうか。一時的な障害ではなく慢性的な持病のようなものと言えるのではないか。そしてそれは、ほかでもなく「この私」のことなのだから、探求の工程の先行きもおぼつかない。打開のための解、それも、凝りを克服するための実効を伴う解方が求められる。

対象化されない「私」のことであるから、凝りのメカニズムの探求も困難が予想される。前稿[3]では、「世界の矛盾」はことばに密接に関わる事象であるとの推定を措いて終えた。その延長で、「凝り」は「ことばに伴う症候」であるという着想が得られる。そこで次に、ことばと世界との関係に関する検討を通じてこの着想の操作を試みる。

4. 解方

4.1 「こと・かた」仮説

まず、「私が凝る」ことによってその世界の展開が停滞する（というより、むしろ逆に、凝っているという自覚は世界の展開の停滞を認めたときに得られる）ことから示唆が得られそうである。

そもそも「世界」という語は、前稿[3]において、ひとびと（思考する自我）の「当人において自明な経験」を語るために充てがったのであって、その導入に際しては概念の形成・整形を伴っていない。この仮解の処分がまず必要である。

前稿[3]では世界の変化に関する観察から導入を得て解を構成した。ここで考えた「変化」とは、単に直前と異なる状態へと移ることを想定しており、相異なる状態が後から後から現れていくことを想定したものではない。むしろ多くのことが繰り返し現れるはずである。

そのうちかなり頻繁に現れる状態またはその局面がそのひとの「日常」ないし「環境」を構成するのだろうが、世界を経験するうちに、ひとはそれ以外にも多くのことが繰り返されていることに気づくことだろう。

このような、ことの推移や情景の繰り返しに対する留意を「かた」と呼ぶことにする。複雑な「過程」の周期的繰り返しばかりではなく、類似した空間的組成を持つ物象が現れれば、「アイデンティカルな物体」と受け止めたり、「同じ形である」と認めたりするのかもしれない。いずれにせよ「かた」は「こと」の生起に感応して生じるはずだが、世界の変化の様子からすれば、かたが新たなことを生成することもあるようだ。

かたの生成が頻繁になるにつれ、かた自体の繰り返しに目が留まることもあるだろう。そのような「かたのかた」もまたかたであるから、ことを生成することもあるはずだが、一般のかたを活字の母型に喩えるなら「かたのかた」は父型であり、かたがことをしばしば生成するように、「かたのかた」から新たなかたが生成されるものなのではなかろうか。

この用語法には整形・修整の余地が多く残されており、容易に既存の用語に対応づけることはできないが、ひとまず「かたのかた」がことばに当たるとすれば、「かた」は概念に比定できそうである。ひょっとすると、

理解・認識、さらには意志・意図も「かた」のうちに包摂できるかもしれない。

この用語を用いると、「凝っている」とは「かた」が固定された状態だと記述することができる。次項では、この着想を種に展解を進める。

4.2 執着と循環という病根

事態が推移すると、いくつかの「こと」が見出され、「かた」が入れ替わる。それに対し、凝っているときは、何らかの原因によって「かた」に関わる変化が抑制されると考えられる。

そのうち、「怒りに我を忘れる」あるいは「忙しくて夢中になるうち無頓着になる」といったようなケースであれば、軋轢や衝突が近々生ずることにより、むしろ変化が促進されると期待される。したがって、問題の焦点は、ことの相とかたとが乖離する可能性にある。

ことば、すなわち「かたのかた」がことと同様に（ことのかわりに）かたを生み出すとすれば、ことばを多く保つうちに、かたがことと離れて生ずる頻度が高くなりそうだ。そしておそらく、それは量の問題ではない。ことばの選択・限定がかたの固定を引き起こし、選択・限定されたことばのセットに対する留意（あるいは執着）が高くなるにつれてことの作用が薄れ、かたの固定が進行するのではなからうか。

ことば（かたのかた）はそもそも「こと」と切り離されているため、固有の生成原理を持つようである。かたに対するだけではなく、ことばそれ自体に対する留意（かたのかたのかた）が現れると、他の形に関する着想が生まれ、新たなことばが分化して併存するようになり、一方では、かたの群れの形に対する作用（体系・整合性の追求や精緻化）が促されるものと考えられる。その過程で、しばしば対立関係が生じ、さらには空虚な循環や不毛な遊戯といった事態も生じかねない。

もっとも、貧弱な語彙であっても、留意の度合いによって（たとえば信仰ないし依存という水準に達すると）堅固な凝りが生ずると見受けられる。いずれしても、ことばに対する留意が強ければその作用だけで充足し（わかった気になり）、世界はことばの生み出す「かた」で埋め尽くされ、完結・自己充足するのだろう。

現時点では機構に関する用語を持ち合わせず、これ以上のことを語ることはできないが、ひとまず、ことばに対する強い留意（執着）とことばが結びついて「凝り」をもたらすという解を手には、先へと進もう。

そのような強い留意は、宗教や思想はもとより、規範意識や信念、日常の些細な癖に至るまで、あらゆる局面に潜む可能性がある。

この解は、「科学的であれ」という示唆ではない。職業としての科学は方法（手順や装置）と因襲（慣習）に依存する組織（集団）的営為であるし、教養としての科学はもとより思想とかわるものではなく、いずれにせよ凝りに関わるという一点において埒外にあるわけではない。問題の焦点は、真偽や妥当性にあるのではない。むしろ、真・妥当を渴望する心性自体が凝りを生むとさえ言えるかもしれないのである。

ともあれ、どうやら「文化」の名のもとに含められる事象すべてが凝りに結びつくようだ。このことから、凝りから解放されるためには文化全体を拒絶または否定する必要があるという極解へと到ることになった。

4.3 転解

そこで求められるのは文化の相対化よりも徹底した工程であり、そもそもひどく広漠とした概念である「文化」が相手だから、拒絶ないし否定という工程がいったいどういうもので、また実行できるのか、はなはだ危ういわけである。それでも、もし仮にそれが実現可能だとして、結果として何が得られるのだろうか。

文化ないし知に対する執着を持たないことにより、首尾よく凝りのない思考を獲得し、純真な目を持ったひとがそこにいる。そのときそのひとには、「ことの世界」がつぶさに見えている（いわば、「まこと」がわかる）のかもしれない。しかし前稿[3]で検討した解に基づけば、世界は常に制約のうちに閉じ込められているのであり、そのような世界の「真の姿」が見えることに偉大な意義があるとは思われない。

では、ほかに方策がないものだろうか。

凝りが不随意・不可避であるならば、ひとまず自然現象と認め、経過観察を行なってはどうだろうか。「しかたがない」ものとして屈するという趣旨ではない。まずはことばを尽くすことによって解や特効の方策がいずれ見つかるかもしれないというもくろみもあるし、また、「凝りということ」に留意することによって、症状の緩和や影響の制御が幾分なりとも可能になると期待される。

ことば（ないし文化）に対する執着は温存されることになるが、凝りに対する留意を厳に保つなら、それらは「単に、ことばにすぎない」ものであり、「知識」という虚飾を帯びた像では見られず、まして真理真実と錯覚することなく、もちろん信仰という媚薬に酔うこともないだろう。当面、自在に制御するようなことは困難かもしれないが、少なくとも、囚われてひとつのかたよりに支配されるようなことはなくなり、その上で、ことばから分立した自我を覚えることだろう。

5. 結び

本稿は前稿[3]に引き続き、ひととその世界に関する考察を進めた。ひとが世界の変化を許容しない状態（前稿の語法では「世界が閉じている」状態）、つまり「わかろうとしない状態」を「ひとは凝っている」と呼ぶという用語法を導入した。続けて、「凝り」の症候や様相に関する検討に基づき、その原因は特定のことばに対する執着であるとの解を得た。

次に、世界・ひと・ことばの三者の間の関係に関して、「こと」「かた」という用語を導入する解を展開し、それを踏まえて「凝り」を回避する方策を検討した。最終的に、ひとが凝ったり凝らなかつたりする様を自然と見なし、それによって自身の凝りならびにことばに対する制御のための下地を得られるという着想を引き出した。

ひととことばというふたつの要素から構成される世界観の追究という企図（背景となる一連の論稿に共通する目的）に照らして漸進が見られたほか、「凝り」という用語の使用により、ひと（思考する自我）自身を見舞う困難に対する方策について、一定の成果を得た。

しかし依然として、論証のみならず論の精緻化をも先送りしている上、探求すべき課題もむしろ増幅している。次のステップでは、まず課題群の包括的再検討から始めることが必要であろう。

文献

- [1] 村主朋英. 情報学の中核にあるもの：根源からの再出発を企図して. 愛知淑徳大学論集文学部・文学研究科篇. No. 35, 2010, p. 123-134.
- [2] 村主朋英. 情報の時空：われわれをとりまくもの. 愛知淑徳大学論集人間情報学部篇. No. 1, 2011, p. 31-44.
- [3] 村主朋英. 情報と矛盾：世界の構成. 愛知淑徳大学論集人間情報学部篇. No. 2, 2012, p. 63-71.